

## 紹介

### ● The Cambridge Medieval History

Vol. VII. Decline of Empire and Papacy.

本巻は前巻 *Victory of the Papacy* の後をうけて昨年出版された。校正中逝去した G. R. Tanner 氏を始め、C. W. Previté-Orton 氏及び N. N. Brooke 氏の編輯になつてたり、大體十四世紀を中心とし、二十六章を二十二人の著名の學者によつて分擔されてゐる。今試みに内容及び著者を舉げて見ると、巻頭の序文は Previté-Orton 氏が書き、第一―二章は伊太利であつて、原稿完成後逝去せる故 Arnstons 氏の「ダント時代の伊太利」とミラン大學教授 Caspense 氏の「伊太利、一三一三―一四一四」がある。前者は英國に於けるこの時代の研究者中最も聞え、後者はすでにこの時代の社會史に關して種々の名著を出してゐる人である。第三―五章は獨逸であつて、Block 氏は「獨逸、一二七三―一三一三」の前半を執筆したが中途逝去のためモントリオールの Mc Ginn 大學教授 Vangh 氏が引續いて後半及び「ルイ、ザ、ババリアン」、「チャールズ四世」の二章を執筆してゐる、教授は獨逸中世末期政治史の動向を東方發展を基調として理解してゐる様であり、ルイに對しては深き理解を持つてゐるがチャールズに關する記述は幾分皮相的であると評さ

れてゐる。(Hist. Vols.) 第六章はブラーク大學教授にしてチエツコスロバキヤ外務次官たる Kotfa 氏の「十四世紀のポヘミア」であり、第七章はチエネヴァ大學 Martin 教授の「中世に於けるスイス聯邦」第八章はロンドン大學の lecturer であつた Veiner 氏の「クンザ」、第九章 Boswell 教授「Tentonic Order」と續き、第十章は既に以前「Les papes d'Avignon」を出してゐるストラスブルク大學教授 Molat 氏の「アビニオンの法皇と大シスマ」である、教授はけだし現今この方面に於ける第一人者であつて、本章に於ては法皇廷の「The Over-centralisation and over-elaboration」を明にし、この時代の法王廷の俗權擴張について述べてゐる。第十一―十三章は佛蘭西であつて、「最後のカペー朝」をロンドン大學教授 Jonsone 女史が、百年戰爭時代をリヨン大學名譽教授 Coville 氏がそれ／＼執筆してゐる。第十四―十七章までは英蘭に關係し「エドワード一世とエドワード二世」を Jonsone 女史、「エドワード三世とリチャード二世」及び「ウイクリッフ」をケムブリッジの fellow Manning 氏が各々擔當してゐる。Jonsone 女史は fine-spun theories よりはむしろ事實の闡明に努めてゐる。これに續いて第十七章は Lloyd 氏の「一〇六六―一四八五年迄のウエールズ」があり、第十八章 Opat 氏の「一三二五年迄の愛蘭」、第十九章 Terry 氏の「一三二五年迄のスコットランド」、第二十章 Arminia 氏の「西班牙、一二五二―一四一〇」、第二十一章 Miley 氏の「露西亞、一〇一五―一四六二」と並んでゐる。以下は特殊項目に移

り、先づ *Foot* 氏の「中世に於けるユダヤ人」あり、續いて *McClellan* 教授の「中世の身分」、*Powell* 教授の「農民生活と農村状態」、*Tracy* 氏の「初期ルネサンス」があり、最後には *Underhill* 氏の「中世神秘主義」の一章がある、この中 *Barrow* 女史のものは多くの人々の興味を引くものであらうが、女史は「中世社會經濟史研究者にして概括にのみ耽る者は、自らが後に落込むべき陷阱を掘りつゝあるのである。農業史程この陷阱の深いものはない。」と述べ、中世の法制史史料のみならず文學的史料をも使用して、社會的存在としての農民の姿を生々と描き、法制史家の農民觀は認識不足にして補正の必要ありと述べてゐる。(cf. p. 743)

以上は本卷の内容であるが、各章間に所々聯絡を缺いてゐる事はこの種のものとしてはやむを得ない事であらう。本卷に於ても *St. Catherine of Siena* に關して *Cogross* (p. 67) *Mollat* (p. 272) *Underhill* (p. 808) はそれぞれ異見を出し、*フランス* に於ける課税問題に關しても *Jonstone* (p. 324) *McClellan* (p. 325) との説は全然一致はしてゐないし、又 *エドワード二世殺害問題* に關しても *Jonstone* (p. 432) *McClellan* (p. 336) とは意見を異にしてゐる事等が *American Hist. Rev.* の評者によつて指摘されてゐるが、これによつて編輯者をせめるよりは、編輯者が各著者の意見を尊重し無理な統一を計らなかつた事に敬意を表すべきであらう。

卷末百五十頁にわたる *ビブリオグラフィ* は相變らず完璧に

近いものである。外誌の書評には若干書籍の遺漏をあげてゐるが、多く咎める程のものではない。他に精細なる索引と別に十葉の地圖が附いてゐる。

我々は今この第七卷の公刊を喜ぶと共に、この大事業が第八卷 *Growth of the Western Kingdom* を以て完成する日を待望するものである。

(Cambridge at the University Press, 1932. XXXVIII + 1073 pages. 8° 50 S.)

### ●西洋中世史料及考證 第一號・第二號

#### 東京商科大学内「西洋中世史料及考證」の會編

「思ふに史料の正解なくして歴史記述を行ふことは、不可能なり、このこと獨り西洋中世史に關して例外たるべからず、しかるに西洋中世に關する本邦研學の現状この點や、忽にせられざるに似たり、われら修學の初階に在るもの、先づこの點に思を致し戦々兢兢として個々史料の解釋に従はんとするなり。」と發刊の辭にある如く、西洋史、特に中世史に關する史料の正解を目的としてをり、更に進んでは嚴密なる史料批判によつて西洋史の理解を深めんとする意企をも持つものと考へられる。

第一、第二兩號の内容を見るに、第一號に於ては、上原專祿氏は *Les Bainsvairium* (「バヌアル族法典」の序言を翻譯され、増田四郎氏は中世獨逸英蘭の通商に關する最も初期の文獻としてハンザ研究に於て重要視される *De telaneo dantio ad Blyn-*

esgate in Londenia を邦譯されてゐる。次に第二號に於ては、上原專祿氏の Capitula de Causis Diversis 第四條の譯及び考證と、門馬淳氏の有名な Beda の "Historia Ecclesiastica" …… 第一卷第一章の一部分の譯が入られてゐる。而して兩號を通じて玉置重男氏は Migne: Patrologiae Latinae の Index Alphabeticus Historiographorum et Chronographorum 所收の著者を順次世紀別に分け、同世紀の者は之をアルファベット順に並べ、その各々に略傳を掲げてなられる。これと Beda の譯とは未完成である。譯はいづれも原文を掲げ對譯になつてゐる。

以上の如き主旨、内容を持つこの新しき試みは充分意義を持つてゐる。ただし本邦西洋史研究に於ては史料の入手、利用については多くの不便があるにせよ研究者として常に根本史料利用への努力、及び史料批判の訓練をなさざる可きり本邦西洋史研究は西歐諸國の研究に追従する他なく、又獨自の立場を立て得ないからである。兩號に於ては未だ斷片的史料が多きうらみはあるがその志す所は極めて貴いものがある。今後この試みを續行されん事を望んでやまない。尙兩號共ミスプリントを懸念されたためか謄寫刷になつてゐるが、これはやはり印刷に附された方がよりよき様に思はれる。(東京商科大学内「西洋中世史料及考證」の會發行、非賣品)(以上鹽見)

### ● 法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究

會津 八一著

東洋文庫論叢の第十七編として今回公にされたこの書は四六倍版、本文二七七頁、圖版一六〇、附録年表索引等四〇頁、上下二冊より成る洵に堂々たる大著である。明治二十一年以來今日まで法隆寺の問題に就いて公にされた論著既に百五十編、今その後を受けてこの大冊を手にするとき、人はまづそれが學界半世紀の懸案に對し最後の斷案を下さんと擬するものなるを思ひ、何よりも先にその結論が再建非再建の孰れにあるかを聞かんと欲するであらう。併しながら既に諸先輩の努力によつてある限りの文獻は涉獵しつくされ、現存建築に就いての調査は許される限り爲し果された今日、問題は寧ろ一にそれらの資料を如何に解釋し如何に批判するか、その態度、その方法に懸つてゐる。その點に就いて人の直に想起するところは、この問題に於て特に困難であり、且つそれ故にまた一般の學的興味をも引いた、文獻的證據と様式論的見解との矛盾衝突であるが、それに就いては著者會津氏は「文獻は實物の文獻であり、實物は文獻の實物である、……史實は一つであるから、此の二つは必ず一致すべきものだ」との確信に立ち、且つ「體系の實さは部分々々の眞實と必ず相俟たなければならぬ」が故に體系の爲に個々の資料の告ぐるところを無視すべきではないとてまづ問題となるところの文獻の一層精密なる吟味からその論を出發させる。われ／＼は一應著者の立論の順序に従つて簡単にその跡をたどつてみよう。(本書は表題の示すやうに法起法輪法隆三寺に就いて三編夫々別個の論文を收めてゐるのであるが、今問題の